



ウェブサイト新設やセミナーを通じ認知の徹底を図る(写真は20回目となった倉庫見学会)

パナ・ケミカルが、従来「廃プラスチック」と呼ばれてきた非バージン系プラスチックの市場地位の向上に取り組む動きを強めている。昨年、リサイクルされるプラスチックについて、廃プラスチックの管理の行き届いた荷受け料に代えて「資源プラスチック」と呼ぶべく業界の有志企業を募って活動を強化し、このほど資源プラスチックのウェブサイトを立ち上げた。21日には通算20回目となる同社の倉庫見学会も開催。プラスチック排出事業者を募って、管理の行き届いた荷受け料に代えて「資源プラスチック」と呼ぶべく業界の有志企業を募って活動を強化し、このほど資源プラスチックのウェブサイトを立ち上げた。21日には通算20回目となる同社の倉庫見学会も開催。プラスチック排出事業者を募って、

パナ・ケミカル

ラの主要仕向け先となる中国の需要動向について、品位を高めた資源プラスチックを扱うことが使用済みプラスチック排出事業者を募り、同社最大の倉庫である横浜倉庫での倉庫見学会を開催。同社の精緻な倉庫管理および、数十年にわたる確

廃プラスチックは「資源プラスチック」と呼んで

業界の意識改革に力

必須の課題であることを強調した。

同社は、国内シェア80%を誇る使用済み発泡スチロールをはじめ、各種プラスチックを取り扱う「資源プラスチック」の大手企業。40年来の歴史を持ち、毎月7000トンを中国・香港や東南アジアなどに輸出している。リーマン・

固たる信頼感で結ばれた海外の顧客などについて、近年は春、秋の年2回開催している。これまでに沖縄などの遠方のプラスチック排出事業者や海外の機械メーカー、日本貿易振興機構(JETRO)と、最近では資源プラスチックの取り組みで

び替えることで、その業界の従事者は処理業者ではなく「資源プラスチック」という意識に変わり、使命感の獲得やより品質を向上しようという意欲の高まりにつながっている。需要家にとっても採用品位での安心感につながる。こうした発想の転換を市場に広げようという考えだ。

横濱倉庫は同社が全国13カ所に保有する倉庫でも月間1500トンを取り扱う最大の倉庫。多い日には10台トラックが10台来て資源プラスチックを運び入れ、保管された後コンテナに積み込んで中国などに出荷される。積み込み方も1つのコンテナにより多くの重量を積み込めるよう工夫を凝らしているが、「過去40年間、誤出荷は一度もない(同社)ことが強みで、海外の成形業者などの顧客からの信頼確保につながっている。積み出された後は横濱港メカターミナルから海外へ出荷される。

「当社のステークホルダーの来客は概ね一巡した。資源プラスチックをアピールする目的もあり、今回初めてマスコミにも紹介していた。ただ、これまで(犬飼健太郎社長)廃プラスチックを資源プラスチックと呼ぶことを、その業界の従事者は処理業者ではなく「資源プラスチック」という意識に変わり、使命感の獲得やより品質を向上しようという意欲の高まりにつながっている。需要家にとっても採用品位での安心感につながる。こうした発想の転換を市場に広げようという考えだ。

でなく鉄や紙も含めて密輸撲滅や輸入規制に抵触する品質の徹底および出荷、輸入ライセンスの厳格化やリサイクル工場への査察などの取り組みが強化されており、「中国は今後ますます品質感のある資源プラスチックしか輸入しない」との見方を語った。

コンサルタントの本堀雷太氏(本堀技術士事務所)も講演。「原料ソースの多様化でバージンプラスチックの低価格化が進むなか、日本国内に廃プラスチックの行き先はほとんどなくなる。海外でもリサイクル原料を使って全うな品質の製品を成形できる事業者を多く抱えるのは中国以外にない」として、この業界は中国とどうまっ付き合うやう方を考えることが生き残るうえでの必須条件であると強調した。